

アメリカ留学における有島武郎の転回

— 三つの労働体験と恋愛事件 —

尾西 康 充

一、問題の所在

一九〇三年八月二五日、横浜港で伊予丸に乗船した二五歳の有島武郎は、森本厚吉とともにアメリカ留学の途に就いた。一九〇六年九月一日にニューヨークを發つてイタリアに向かうまでの約三年間をアメリカで過ごし、その後の生涯を決定づけるさまざまなできごとを経験した。有島は伊予丸に同船していた三人の牧師、そのなかの一人がニューヨークのユニオン神学校に留学する明治学院神学部教授柏井園であったが、彼らに対してキリスト教の罪に関する疑問を打ち明けた。一九〇三年九月一日の日記に「心霊ノ經驗裕カナル可キ是等牧師等ノ間ニ適當ナル解釈ヲ与ヘ得ラレンカトノ幽カナル望」を抱き、「余ガ今日心中ニ最苦痛トスル所ノモノ」を尋ねたとある。

罪人ハ何故ニ罪ヲ犯スヤ。罪ヲ犯ストハ犯セルモノ、罪カ。然ラズシテ他ニ之レヲ犯サシムル力アルニアラザルカ。

換言スレバ人ニハ free will ナルモノアリト云フ。而シテ free will ヲ分解スレバ神意ニ従順ナルカト之レニ逆行スルカトノ二ツニ分タル可シ。罪ヲ犯ストハ所謂第二ノ力ガ第一ノ力ヲ圧スルナリ。苟モ第一ノ力第二ノ力ヨリ勝リテ誰カ好テ罪ヲ犯スモノアランヤ。不幸ニシテ第二ノ力第一ノソレニ勝ルガ故ニ罪人ナルモノハ寧ロ勢罪ヲ犯スニ至ルニアラズヤ。是レヲ以テ彼ヲ罪人トナシ、彼ヲ惡ミ、彼ヲ呪ヒ、彼ヲ擬スルニ永遠ノ地獄ニ逆落スベキモノトナスノ理由何レニアリヤ。

「怠惰と性慾」に自己の罪意識を感じて信仰に目覚めた有島にとつて、神が創造した世界に悪が発生するはなぜか、また人間にある「free will ナルモノ」が神の意志に背いて罪を犯すのはなぜかという疑問は、喫緊に解決すべきものであった。だが彼らから納得のゆく回答が得られず、有島は「いつでもその人

達から懸離れた処にゐる」ようで、彼らから自分は「基督教の皮を被る異教徒」としてみられていると感じていた。その後フイラデルフィアのハヴァアフォード大学で修士号を取得した後、一九〇四年七月一九日から二カ月間フレンド精神病院に看護師として勤めることになった有島は、事務長ヘンリー・ホール(Henry Hall)の娘エディス(Edith)に密かに思慕を抱きはじめてた。「リリー」という愛称をつけて呼んだ「一個可憐ナル小児」に対する倒錯した性愛から逃れようとし、「汝ハ余ガ苦痛ヨリノrefuge ナリ。働ケ働ケ、顚顚ヨリ血潮ニジミ出デン沾テ働ケ」と労働に専念しようとした(一九〇四年八月一五日日記)。

ポストンのハーバード大学大学院で学ぶためにフレンド精神病院を辞めることになったとき、有島が看護を担当していたジョセフ・B・スコット博士(Dr. Joseph B. Scott)にかけられた言葉によつて有島の罪意識は一層深刻になってしまふ。一九〇四年九月二六日の日記によれば、病院を去る有島が博士に別れを告げた際、博士はつぎのように語つたという。

余ガ彼ノ院ヲ去ラントスル時ナリキ。彼ハ堅ク余ノ手ヲ握リ涙ニ満テル声モテ余ニ謂テ曰ク、

「御身ハ実ニ我ニ優シカリキ。御身ノ余ヲ慰藉セントシテ尽力セルハ我ヨク之レヲ知ル。而シテ余ノ克ク此慰藉ニ酬ヒテ余ノ煩悶ヲ翻ス能ハザルハ余ノ力ノ及ブ所ニアラザレバナリ。神既ニ業ニ余ヲ永遠ノ刑罰ニ命シ給ヒヌ。如何ナ

ルカモ亦ヨク余ヲ再ビ昔ノ余タラシムル能ハズ。一度基督教徒トナリシモノ、罪ヲ犯スニ増シテ世ニ恐ル可キモノアルコトナシ。余ハ御身ノ基督教徒ナルヲ知ルガ故ニ特ニ云フ。忘レテモ罪ヲ犯スナカレ。人ニハ親切ナレ。人ニ教ユルノ機会アラバ互ニ相愛ス可キヲ教ヘヨ。余ガ離別ニ臨ミ御身ニ遺スノ語只是レノミ」

ト暗然トシテ其室ニ入り去リス。

「一度基督教徒になつた者は、罪を犯すこと以上に、世の中で恐ろしいことはない」という博士の言葉は、有島の心を強くとらえ、「余ハ此一大事件ヲ忘レジ。余ハコヲ重ネテ思ヒメグラス可シ」と心に誓わせた。しかも病院を去つた直後にスコット博士が縊死したことを、有島はフイラデルフィアからポストンに向かう汽車のなかで偶然目にとまつた“Evening Bulletin”紙の記事で知つて愕然とさせられるのである。宮野光男氏が指摘するように、フレンド精神病院での生活は「有島の人間性を疎外するものを感覚的に否定しはじめた時であると同時に、あえて人生を不可思議なる迷路として、なおも人間の生きる路を求めて止まぬ誠実な人間追究への志向の契機となつた」ものでもあつた(1)。

有島の「怠惰と性慾」に関する罪意識は、ポストン滞在を経てワシントンDCで米国議会図書館に通う一九〇五年一月から〇六年八月にかけて、(この頃の日記や書簡がほとんど遺され

ていないという事情もあるが、留学当初のような過剰さは影を潜めるようになっていた。一九〇六年四月五日の両親宛書簡には、佐藤昌介札幌農学校長からの同校教授就任の要請を断つて、「自ら一個の思想を形成する力と夫れを現示する筆の力」に恃んで自立しようという主体的な決意がみられるのである。「筆を取り手世に立つにハ何人之干渉も受けず独立して公平なる思考を世に給するが何物ニも勝りて急務と相信申候」という考えには、議会図書館で読みふけて「肖像画及ヒ其生地ノ写真」を写し取つたほどの入れ込みようであつたノルウエーの作家ヘンリック・イブセンの精神、すなわち『人民の敵』(一八八二年一月二八日)の主人公ストックマン医師が作品の最後に語る「この世で最も強い者は、ただ一人で立つている者だ」という独立不羈を貫こうとする精神が脈打っている。有島における作家的出発の基礎になつたと思われるこの決意は、アメリカ留学中のどのようなできごとによつて形成されたものなのか、それを解き明かす手がかりを三つの労働体験と三つの恋愛事件のなかに求めようと思う。

二、有島的神義論

アメリカ留学中の有島自身がモデルとなつた小説『迷路』(有島武郎著作集)第五輯、一九一八年六月、新潮社)の主人公「A」は、人間の自由意志と神の選びの相克をめぐる自由論と予定論との対立、すなわち「意志の絶対自由」「無限の自己責任」と「宿

命の鉄鎖」との対立に苦しめられていた。これはキリスト教神学において「神義論」(Theodicy)の問題として古来論じられてきたテーマに通じ、川鎮郎氏も有島における「神義論的懷疑の成立」に論及している(2)。人類を神の選びに定められている者と滅びに定められている者との二つのグループに分けるというカルヴァン派の厳格な「二重予定論」(Double predestination)を批判した現代神学者カール・バルトによれば「予定は、神によつて永遠からして決定された人間の無罪宣告——神ご自身の不利益となる仕方、人間を棄却から解放する無罪宣告、その中で神がご自身を、無罪宣告された者の代わりに、失う者、見捨てられた者、捨てられた者へと定め給う、すなわち、世の初めからして、ほふられたあの小羊へと定め給う人間の無罪宣告である」という(3)。神は罪深き人間に代わつてイエス・キリストを十字架上で刑死させ、人間の罪はイエス・キリストの死によつて贖われるとされている。一九三六年六月にジュネーブのカルヴァン主義神学の国際会議に参加したバルトは、予定論の問題を集中的に扱うワークショップに出席し、ピエール・モーリーによる講演「選びと信仰」から強い影響を受け、「恵みの選びの教説のキリスト論的な意味と根拠に対して、われわれの時代の新しい注意を喚起」したとする(4)。バルトによれば、「神はわれわれの苦しみを、ご自身の苦しみとして選び給うた。そのように全く神の選びは恵みの選び、愛の選び、ご自身を犠牲として捧げ、神によつて選ばれた者のためにおのれをむなし

うし、卑しいものとしようとする「選び」であつたとし(5)、神は「人間の自由の問題性の故に、そもそも創造しようと思志しないでいることができたであろう」が、それでもなお「人間を、ご自分の契約相手に選び給うた」という(6)。自己の罪意識が過剰であつた有島は、神によって自分が裁かれることに恐れを抱くばかりで、イエス・キリストの贖罪というキリスト教信仰にとつて大切な要素には、十分な関心を払っていない。贖罪と復活にみられる神の愛を信じることを抜きにしてはそもそもキリスト教信仰が成り立たないともいえるのだが、なぜ有島はそれらを受け入れようとしなかつたのだろうか。バルトは「神の裁きの前提」としてつぎのような説明をおこなっている。

神は、われわれに対し、イエス・キリストにあつて恵み深くあり給うことによつて、われわれを裁き給う。神は、ご自身のみ子のゆえにわれわれを神に属するものとして取り扱うことを欲し給うがゆえに、われわれを裁き給う。神は、ご自身のみ子の死において、われわれのすべての行為に対し、違反行為として有罪の判決を下し、み子の甦えりを通してわれわれを正しと宣言されることによつて、われわれを裁き給う。神は、その支配のもとでわれわれを永遠の生命に向けて自由にするために、われわれを裁き給う(7)。

バルトによれば、神はイエス・キリストにおいて人間のために(然り)を選び、人間に向けられるべき(否)をみずから引き受けることにした。神の裁きは「永遠の生命」に向けて人間を「自由」にするための前提であつたという。この前提を認めようとしなかつた結果、有島は自由論と予定論の対立に陥つて、そこから抜け出せないでいたのである。有島の「原年譜」(文壇諸家年譜(26))、「新潮」一九一八年三月)には、「二カ月の苦しい勤務の結果自己の精神状態にも不安を感じ出してそこを退き、ハーバード大学の大学院に這入つた」とあるように、有島の罪意識が一層深刻になつて精神的な葛藤を招いた原因は、フレンド精神病院での勤務体験と、「一個可憐ナル小兒」に対する倒錯した性愛とであつた。さらに「原年譜」には、フィラデルフィア時代に続いてつぎのような記述がみられる。

三八年思ふやうな収穫なく大学を去りその夏はニュハンブシャー州のある農家の台所を働いた。一緒に働いてゐる日本人の恋愛事件に座して急にそこを立退いた。バルチモアに行つて暫らく森本と共に住んだ。それからワシントンD Cに落付き、議会附属図書館で初めて勉強らしい勉強をやりに出した。イブセン、トルストイ、クロポトキン等を潜読した。百姓にならうか教育者にならうか、文学者にならうかといふ實際問題が頻りにぶつかつて来た。

三九年或る恋愛事件に座し短銃を以て生命を脅かされた。

極度の神経衰弱に陥て百姓家に遁れた。(下略)

右の記述を補って説明すれば、以下のようになる。夏季休業に入る直前にハーバード大学大学院の聴講を辞め、一九〇五(明治三八)年六月二日からニューハンプシャー州グリーンランドのE・S・ダニエル農場で阿部三四とともに働いた。このときポーランド移民とともに働いた体験は、「原年譜」に帰国後に就く職業の選択肢として「百姓にならうか」とあることや、『迷路』のなかにも理想化されて描き出されていることから、晩年に農場開放を断行する有島の生涯にとって重要な意味があったと考えられる。帰国して農科大学に赴任した後、札幌で開かれていた蠣崎知次郎や吹田順助たちの社会主義研究会で有島は「アメリカ時代の筋肉労働の経験について話す。彼等は大変興味を持ったようだ」と一九〇八年二月一三日の日記に書いている。しかし阿部の「恋愛事件に座して急にそこを立退いた」とあるように、ダニエル農場での労働は長く続かず予定を繰り上げて七月二四日にそこを去った。一九〇五年七月二四日の両親宛書簡には「共ニ働きつゝありし友の一方ならず衰弱し殊ニ厭ハしき事誼其家との間ニ起り候為め」に仕事を辞したとあるだけで、どのような事件が起こったのか詳細は不明だが、何かの人種差別に関わる性的暴力事件であったことが推測される。有島は日本国内にいる限りは、人種や国籍を意識させられることもなく(良くも悪くも)自分が有産階級者であることの意識を

持つことができたのだが、ひとたびグリーンランドの農場に来てみればポーランド移民たちに交じって働く最下層の外国人労働者のひとりでしかなく、黄色人種に属する人間として蔑視の対象にさえなったのである。アイデンティティ・クライシスに揺れるなかで遭遇したこれらのできごとが、フレンド精神病院での看護師としての勤務を終えた後に続く第二の労働体験と、それにまつわる恋愛事件であった。

この事件の後、一九〇五年八月二五日にポルティモアに移って森本厚吉と共同生活をはじめ、さらに十一月二日に森本と一緒にワシントンDCに移って、朝から晩まで議会図書館でイブセンやトルストイ、クロポトキン、ツルゲーネフ、ゴーリキーなどの北欧・ロシア系の思想的な文学作品を読みふける。この結果、有島は「是れまで外界の因縁の為に四分五裂してゐた自分といふものが寄せ集められて自分に帰つて来るのを感じ出した。芸術に対する私の観念が見る／＼變つて来た。神の信仰の中に見出し得なかつた本当の自分の姿を文豪の作物もなかに見出すのを知つた」という『リビングストーン伝』第四版序言、一九一九年六月、警醒社書店)。

一九〇五年一月二〇日の幸子宛書簡によれば「図書館にて勉強中不図したる事より同館内なる印画部長と懇意ニ相成候処同館ニ購求したる日本古代之印刷物之類別ニ苦ミ居候由にて小生ニ其整理方托し来申候」とある。有島にとってこれは「有益なる仕事」で「日本美術史之一班をも窃ひ知り得る」ものと思

われ、「毎日二時間」ずつ働くことにしたという。浮世絵の収集家として著名であった新聞「ワシントン・スター」社主兼編集長クロスビー・スチュアート・ノイズ(Crosby Stuart Noyes, 1825-1908)によつて一九〇五年一〇月に議会図書館に寄贈された収集物をノイズの事務所で分類整理する仕事を有島が手伝つたのである。一九〇六年二月八日の日記に「午後八 Department of Print ニテ働ク」とあることから米國政府印刷局でカタログの作成と刊行にも協力していたことが分かる。このときの労働が本人にとつて意義のあるものであつたと思われるのは、一九〇五年一月二十九日の末光積宛書簡には、最初の週を終えて「自分之労働で取つた金」のうち五ドルを遠友夜学校で教えた瀬川末に与え、二ドルを札幌独立基督教会に献金するためにわざわざ送つてゐることから分かる。他方「原年譜」のなかに、一九〇六(明治三九)年に「或る恋愛事件に座し短銃を以て生命を脅かされた」とあるのは、同居していた森本が引き起こした恋愛のトラブルによつて短銃で殺されようとし、神経衰弱に陥つた有島が四月二四日にワシントンDC郊外のチエヴィ・チエイスに逃れて農家の一室に下宿して心身の恢復に努めたこととされている。前出の一九〇六年四月五日書簡には、

「春來と共に激しき不眠症ニ犯され催眠薬を用ひ申し候而も六時間以上睡眠を為すコト不能神経ハ昂進して為すコトよりも考へるコトのミ多く」ある現状を伝え、「林檎の花咲く頃と相成候はゞ一週間程田舎ニ出で其処にて論文の浄書にても致候得者病

も軽快ニ相成候事と樂ミ待居候」とある。「論文の浄書」をするという「論文」とは、同書簡に「当地滞在間に既ニ一篇の原作と論文とを相草し申候」とされる「論文」を指すもので、有島は「機会あらば版朝前ニ出版」したいと考えていた。つまり恋愛事件に巻き込まれたためにチエヴィ・チエイスに逃避したのではなく、最初から「論文の浄書」のために一時的に郊外に転地しようとしていたことが推測される。つぎにこの第三の労働体験と恋愛事件を整理してみよう。

三、ワシントンDCでの労働体験と恋愛事件

『リビングストーン伝』第四版序言には、ワシントンDCでの生活について「私は無我夢中で自分といふ迷路を処構嫌はず歩きまはつた。そこに或る他人に関する恋愛事件が突発して、それに心身を悩ましたのと、滅茶苦茶な勉強とが原因となつて、可なりひどい神経衰弱に陥つてしまつた。而して華盛頓を逃れてその近郊の百姓家に寄寓した。そこでやゝ四ヶ月は私に静思の余裕を与へてくれたやうだつた」とある。一九〇六年五月一三日の両親宛書簡によれば、有島がチエヴィ・チエイスに滞在していたのは四月二四日から五月一〇、一一日までとされ、七月二〇日の両親宛書簡で伝えられるように森本とともに「市外なる田舎」で過ごすことがあつたにせよ、そこに滞在し続けていたわけではなかつた。だがこの四カ月間は、有島が主体的な決断をおこなうために「静思」するための重要な時間になつ

たことには間違いない。

一九〇六年五月一三日の両親宛書簡には「先月二十四日当市より電車にて四十分程相かゝり候 Chavy Chase と申候所之さゝやかなる下宿屋ニ移り毎日二三時間華府ニ出て、必要なる事務を致候外ハ決心して何事もせず日を送り申候所一週間目程より功能稍頭ハれ略六時間ハ眠るコトを得る様相成申候」とある。この書簡では恋愛事件のことには何も触れられず、不眠症が恢復してきたことを伝えている。毎日二、三時間ワシントンDC市内に出て処理している「必要なる事務」とは、一九〇六年二月八日の日記に「午後ハ Department of Print ニテ働く」とあつたように、ノイズ・コレクションのカタログの作成と刊行を指し、政府印刷局に勤めていた体験にもとづいて自分の論文を「機会あらバ飯朝前ニ出版」したいと考えるようになったと考えられる。浮世絵などの美術品自体には興味を示さなかつたものの、このようにして編集出版業務に関わつたことは、有島にとって「筆を取りて世に立つ」ことを志すきっかけの一つになつたのではないか。

他方「短銃を以て生命を脅かされた」というのは、一九〇六年一月一日に「愈喰フテ生キル丈ケノ人間ト相場ガキマレバ短銃ノ一発アルノミ」とあるように、人生を賭けて一大事をなしとげようとする悲壯な決意をしようとしていたことの比喩的表現として、恋愛事件とは別に考えるべきかもしれない。だが有島がニューヨークを發つてヨーロッパに向かうプリンセス・

アイリーン号上で書き残した一九〇六年九月二日の日記には、胸裡で浮かび上がらせた幻想の少女「ファニー」に語りかける方法で、「森本兄は今頃何をしているのだろう。君は彼を哀れんでいるのではないかな、ファニー。僕は彼の後に残されたあの哀れな娘にも同情する」と記している。このとき森本は、有島の代わりに札幌農学校教授に就任するために日本に帰ることになつていたのだが、帰国を決意するに際して「あの哀れな娘」の間に別れ話を持ち上がり、何かのトラブルが発生していたことが推測される。このとき有島が生命を投げ出すほどの覚悟で、森本と「あの哀れな娘」との恋愛に関与しようとしていたとも考えられる。

ところで有島がキリスト教信仰を抱くことになつたのは一八九九年二月、森本と一緒に自殺しようとして入つた札幌定山溪で彼と共同自炊生活をするうちに「宗教的有頂天」にとらえられて信仰に目覚めると同時に、「その有頂天が呼び起す恐るべく緊迫した性慾の発作」にも襲われる体験をしたことによる。「性慾」に由来する罪意識を払おうとして「信仰」に打ち込もうとするが、「性慾」を克服する役割を期待された「信仰」そのものが、森本に対する同性愛的な「性慾」の昂進とともにもたらされたものであつたという深刻なジレンマが存した。フィラデルフィアでみられた精神的な葛藤は基本的に、このような「性慾」と「信仰」をめぐるジレンマにつながるもので、倒錯した性愛は罪意識を深めるばかりであつた。ボルチモアとワシントンD

Cでの共同生活を続けるうちに、森本が「あの哀れな娘」との恋愛に走ったことは、有島にとつて狂おしいほどの嫉妬を感じさせられる一方、倒錯した性生活から解放されるきつかけにもなったのではないか。一九〇六年七月二〇日の両親宛書簡には、有島は森本との「暫くの離別を惜む為市外なる田舎ニ下宿を見出し愉快に消光罷在候」と伝えている。「市外なる田舎」がチェヴィ・チェイスとは書かれていないが、この穏やかな書きぶりからは森本の恋愛事件をめぐる騒ぎが一応収束していることがうかがえる。このようにワシントンDCでの労働体験と恋愛事件は、「怠惰と性慾」に自己の罪意識を感じていた有島の精神的葛藤をかえって和らげ、新しい人生に出發するための転回を推し進める効果を持ったと考えられる。

一九〇六年五月二〇日の両親宛書簡には、「当市ハ近年稀ナル暑サノ由ニテ去ル一七日ノ如キハ午前六時室内ニテ寒暖計九二度」を示しているという。摂氏に換算すれば三三・三度という暑さのなか、有島は毎日議会図書館に通つて読書三昧の生活を送っていた。一度はドイツ留学の希望を両親に伝えたが、それを撤回してヨーロッパ旅行に替え、「今迄得タル智識ト力量トヲ以テ成效スルニセヨセザルニセヨ実行ノ生涯ニ入り試ミ候」とする。しかし今の自分に最も欠如しているものは「實際ノ経験ト實際ノ経験アル人ガ有セル如キ自己ノ力量ヲ確信スルノ性情」で、それを「矯メンニハ一先準備ヲ結了シ断然實際的戦闘ノ生涯ニ入り試ミノ決心」をした。具体的には「人生最初

ノ戦闘」として「筆ヲ通シテナサル、広義ノ於テノ教育事業」に携わりたいという。著作を通じて社会啓蒙をおこないたいという決意の背景には、人種差別に関わるアイデンティティ・クライシスに揺れるなか、移民労働者たちが働く理想社会を目的に当たりにしたグリーンランドでの労働体験と、ノイズ・コレクシヨンのカタログの作成と刊行を政府印刷局でおこなっていた体験とが存していることが考えられる。さらに有島が転回するに際して思想的原動力になったのは、有島が議会図書館で耽読していたピョートル・クロポトキンとヘンリック・イブセン、とりわけイブセンではなかったか。すなわち「内容紹介にすぎぬが、『ブランド』を書いて、すでに故国に送っていた」と瀬沼茂樹が推定した戯曲『ブランド』(“Brand”, 1866)の主人公ブランドン牧師補は(8)、「信仰の真似事」をするだけですべてを擲つてまで神に仕えようとしないうち自己保身的で中途半端な民衆を嘲つて「僕は自分がクリスチャンかどうかさえ怪しいものだと思つている。だが、これだけは知つている。僕は人間だ」と言い放つ(9)。「無か一切か」という極限まで神に自己を賭けて生きる道は、ブランドンに「生きるというのも芸術」であるとし「言葉ではなく実行だ!」と叫ばせる(10)。小玉晃一氏は「実体のない、行為のない抽象的な愛のみを云々する当時の教会の微温湯的な偽善的な面に反発していた有島が、ブランドンの義のみを求めて強く生きた態度に、よしんばそれが敗北ではあつても、烈しくひかれ、教会的な信仰とは反対の、有島自身の道を一步

強く踏み出したのは当然のこと」とする(11)。

四、有島における作家的出発の基礎形成

イブセン研究家で翻訳家原千代海は、一八六九年一〇月ノルエーのクリスチャニア劇場で『青年同盟』終演後、イブセンが「物を書くとはどういうことを言うのでしょうか？」というスピーチをしたことを紹介している。その答えとしてイブセンはつぎのように語ったという。

近頃になってやっとわかったのは、書くというののもともと見ることで、ということです。ただし、——いいですか——見られたものが、作者がそれを見たのとまったく同じ形で読者のものになるように見ることで、しかし、本当にそれを生き抜いたことだけがそう見え、そうなってくるのです。しかも、それについて書くことを生き抜くということこそが、近代文学の秘密なのです。過去十年間に私が書いたものは、すべて、私が精神的に生き抜いてきたものです(12)。

イブセンが生きているということと書くということを一体化せると語ったことは、教会に重きをおくキリスト教をラジカルに否定して「生活と信仰が一つに融合される」ことを目指したプランの激しさに重なるもので、有島はそこにこれから自分が進

むべき道を見いだしたのだと思われる。イブセンが逝去した一九〇六年五月二三日の日記に、有島はイブセンのことを「民衆の中に臆病と瞑蒙とを見、数少なき開拓者のために断乎として戦ひし」者とし、「現代の気高き基督(人の罪を負ふもの)逝きしなり」という追悼の言葉を書き残した。自己の犠牲を受け入れることに努め、思想と実践を一元化させて生きようとした有島の作家的出発はこのようにしてその基礎が準備されたのである。アメリカ留学を否定的に描写した『リビングストーン伝』第四版序言にある「歐洲に旅立つ前に、一人の文学愛好者として、教員でもして一生を過さうといふ決心をした。それは悲しい諦めだつたが、私は貧しい頭腦の自分自らが文学者にならうといふやうな決心には如何してもなれなかつた」という言葉のために、栗田廣美氏の『亡命・有島武郎のアメリカ(どこでもない所)への旅』(一九九八年三月、右文書院)の成果はあるものの、従来の研究では有島のアメリカ体験は十分に評価されないままであつた。しかし有島は帰国後まもなく、「徒らに悲しませることになると思つたので、ともかく父の生きてゐる間は黙つてゐることにした」との結論に至るものの、狩太農場主の父武に対して「この農場を投げだすことを言ひました」とあるように、生涯にわたる大きな転回を潜在的な次元で遂げていたのである(13)。

註

本文中の引用に関して有島武郎は『有島武郎全集』（筑摩書房）からおこなった。なお旧字体は新字体にあため、ルビは適宜省略している。

(1) 宮野光男「フレンド精神病院における看護夫生活の意義の考察」『有島武郎の文学』一九七四年六月、桜楓社、三七頁

(2) 川鎮郎「有島武郎における『神議論』的懷疑の成立」『有島武郎とキリスト教並びにその周辺』一九九八年四月、笠間書院、三九頁

(3) カール・バルト『教会教義学 神論Ⅱ／1』（Karl Barth "Die Kirchliche Dogmatik, Zweiter Band, Die Lehre von Gott", 1942）（吉永正義訳、一九八二年五月、新教出版社、三〇三頁）

(4) 同右、二七九頁

(5) 同右、二九八頁

(6) 同右、三〇一頁

(7) カール・バルト『教会教義学 神論Ⅱ／3』四三三頁

(8) 瀬沼茂樹「留学前後の有島武郎（下）」『文学』一九六四年一月、六〇頁

(9) 原千代海訳『イブセン戯曲全集』第二卷（一九八九年八月、未来社、二五七頁）

(10) 同右書、二六一、二九九頁

(11) 小玉晃一「有島武郎とイブセン」（『青山学院大学一般教育部会論集』第三号、一九六二年三月、五八頁）

(12) 原千代海『新版イブセン 作品と生涯』（一九九八年六月、三一

書房、一八八〜一八九頁）

(13) 「農場開放顛末」（『帝国大学新聞』、一九三三年三月）

「おにし・やすみつ 本学教員」